

まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL.57



城川町

## 特 ローカルに生きる 集

—地域イベントに夢をのせて—

- 大空への夢—塩塚高原で鳥になろう—
- 瀬戸内シースクールへようこそ
- 唐川びわ祭りとびわ葉茶
- 浪漫街道と浪漫八橋を活かして
- でちこんか'98 引き継がれていく音

論談 まちづくり—

鳥取県米子市 向井 哲朗

■キラリ光るまち

新潟県 津川町

好評連載

★歩キ目デス&足ラテス

岡崎 直司

アングル

モルプシー野外博物館の知恵 ..... 松山工業高校建築科教諭 / 犬伏 武彦 ..... 1

◎集『ローカルに生きる』

一地域イベントに夢をのせてー

大空への夢ー塩塚高原で鳥になろうー ..... 新宮 村 / 鈴木 邦雄 ..... 2  
 瀬戸内シースクールへようこそ ..... 大三島町 / 藤原 元久 ..... 4  
 唐川びわ祭りとはびわ葉茶 ..... 伊予 市 / 大西 要 ..... 6  
 浪漫街道と浪漫八橋を活かして ..... 河辺 村 / 梅木 良照 ..... 8  
 でちこんが'98 引き継がれていく音 ..... 広見 町 / 二宮 浩 ..... 10

論談ーまちづくりー

環境を基軸にしたまちづくり・グラウンドワーク運動の実践的展開ー ..... 鳥取県米子市 / 向井 哲朗 ..... 12

キラリ光るまち

狐の嫁入り行列に似合ったまちづくり ..... 新潟県津川町 / 後藤 九一 ..... 14

リレーでちょっとーク

青年団と私 ..... 三瓶 町 / 紀伊野勇人 ..... 16

おばさんの野望 ..... 松山 市 / 立花 英美 ..... 17

いきいきグループ紹介

ふるさと工房美翔 ..... 御荘 町 / 山岡 強 ..... 18

風おこしのちかい

世界遺産に向けて ..... 玉川 町 / 小山田憲正 ..... 20

研究員レポート

第16回逆手塾に参加して ..... 小川 龍児 ..... 22

自分発見の旅へ ..... 檜垣 明宏 ..... 24

MY TOWN うおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス ..... 岡崎 直司 ..... 26

Information

媛のくにフラッシュ〈津島町・三崎町〉 ..... 28

まちセンからのお知らせ ..... 29

特集「ローカルに生きる」

今号のテーマ

地域イベントに

夢をのせて

これからの季節、各地でいろいろなイベントが目白押しです。

うまくいったり、思いがけないことが起こったりと、携わっている人にとっては何かと気苦労も多いのではないのでしょうか。

ところでイベントは、人々の関心を地域に引き付ける有効な手段となります。そのコンセプト(ねらい)を明確にし、長期的な展望を持つことで、継続され、交流にもつながります。

また、地域に一定の刺激を与えることから、地域そのものを見直すきっかけにもなります。地域を良く知れば、地域への自信が生まれ、そこで生きることへの誇りも生まれます。

このことは、ローカルに生きるという、より地域に密着した生き方へもつながっていきはります。

そこで今号では、歴史・文化、産業、自然環境などの地域資源を活かしたイベントやそれに関わる人にスポットをあて、特集を組んでみました。

(編集子 伊)

表紙の言葉

この暑い季節に、この熱気の凄さはいったい何かと思う程の人も祭りにです。見た目には観客よりも、ズームカメラ、三脚の砲列にびっくりです。

昔ながらの田植に牛十頭の整列。カメラ意識か、足並みが揃わぬ出番待ちの、天の邪鬼と太夫三人も大笑い。

出店のお面を前に、負けぬ顔すらに私も吹き出す。

柳原 あや子



# 『モルフシー 野外博物館の知恵』

松山工業高校建築科教諭

犬伏 武彦



北ドイツ、キール市郊外に六十ほどの民家を保存する野外博物館がある。一九七〇年代、経済成長の波にドイツでも昔からの民家が消滅しようとしていたが、それに気づいた人達の声をきっかけに、各地で民家を保存しようとする気運が高まった。国境を陸地で接する国、多くの民族が暮らす国、そのような国での伝統的民家は、地域・民族のアイ

デンティティの確立という面からも、日本とはまた異なる保存運動となったのだろう。が、それにしても日常の風景のなかに民家があり、暮らしに溶け込んでいる。車で通る道端に藁葺きのレストラン、小ホテルがあり、茅葺きの大きな農家が、赤い屋根の並ぶ住宅街に堂々と立っている。若い世代のなかには、好んで郊外の農家を買って何年もかけて住まいに修復している姿を見た。近所の農民が手をかしている光景も見た。民家は生きていた。

その上に民家を保存・展示する博物館があるのだ。規模こそ違え、ドイツ各地にそのような施設がある。その内の一つ、モルフシーの博物館には六十軒の民家・農家が、森の中、丘の上、池のほとり：と、まるで特別な村を見るように展示されている。建物だけを見て回るだけでも、半日は十分にかかる広さである。博物館に入っ

てすぐ、一つの民家の前に大勢人が並んでいる。何だろう？と見ていたら、その家の釜でパンが焼かれ、販売されている。そのパンは昔風のスタイルを守り、小麦さえ古い品種を博物館の畑で栽培していると言うのだ。ハム・ソーセージについても、また別の建物の中で作られ、人で賑わっている。

家の内部には暮らしていたままに家具や農具を置き、テーブルには食器を並べ、生活ぶりを描けるように展示されているのは、どこも同じとしても：、つぶさに見学しているとそれ以上に民家と共にあった暮らしを生きたまま示そうと意図していることが分かってくる。裏庭は、典型的なドイツの庭になっていると言

う。左右対称に、野菜、花、果物、果樹の順に植えられ、その世話にはボランティアに任されている。おばあさんは毎朝博物館に来て、まるで自分の家の庭のように、種をまき、水をやり、世話をする。庭の花が窓辺を飾り、採れた果物のびん詰めが並んでいる。民家の保存が人を生かしているのである。

博物館の建物の修理もまた一線を退いた大工さんが、それも古い民家を修理場として働いている。牧場の牛から絞った乳でチーズが作られ、その建物はそんな農家まるごと移築しているのだ。そして、博物館生活の伝承や来館者の娯楽性だけを追求するものではない。シュレスヴィヒ・ホルスタイン州各地の民家を把握し、その現状の調査を丹念に行ない、研究の成果が発表される。高度な専門性も博物館はもっている。家は人が住んでこそ生きるものであり、その同じ意味から、地域づくりはものど人間が有機的に働いてこそ、楽しめ成功するものだと、北ドイツの博物館を見てつくづくと思った。



ださい。

SSCって、何？

SSCは、Shiozuka・Sky・Clubの頭文字から取ったものです。平成三年に組織を結成した当時は、「SSCって、何？」と、よく質問されたのですが、我々の活動が定着した今日では、村民の間やパラグライダー愛好者には広く知られるようになりました。

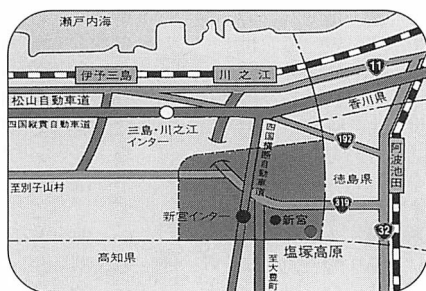
初代会長になって今年で八年目となる私は、現在、新宮村議会の一期目の新人議員であり、家では専業の百姓です。会社勤めをやめて早三年。村づくりと野良仕事、そしてパラグライダーの普及活動に明け暮れる五十四歳です。パラグライダーといえれば若者のスポーツといった感じを受けませんが、決してそんなことはありません。事実、六十歳を過ぎてからでも始められる方が大勢います。

### SSCの結成へ

それでは、SSCを結成するに至った経過と活動内容についてご説明します。

昭和六十三年ごろ、塩塚高原でパラグライダーをする人が現われました。そのことが口コミで徐々に広がり、四国四県から愛好者が集まりだしました。折しもパラグライダーというスカイ・スポーツがハング・グライダーに替ってブームを巻き起こしていた時期でもありました。

塩塚高原は新宮村のシンボリックな存在です。一、〇四三



メートルの頂上と、中腹にあるならかな斜面。そして麓に広がる原っぱには何一つとして構造物がなくて、パラグライダーを体験したい初心者向けのコースとしては、四国一の条件を備えていました。これこそが自然の恵みです。

なだらかな斜面、広い原っぱという以外に何もなかった高原に、民間資本によるスキー場やスケート場の計画が幾度となく浮上しましたが、その度毎に立ち消えていきました。

村役場も塩塚高原を観光の拠点と位置づけはしているものの、その開発には二の足を踏んでいました。そんな折の平成二年前ころ、四国四県からやってくるパラグライダー・スクール間で、場所取りのいざこざが頻繁に起こるようになり、また人が多くなれば増えはじめるのが空き缶類などのゴミ。土地所有者からは「断りもなく勝手に土地を使用しないでください」という声も出始める危機的状況となっ

## 『大空への夢』

―塩塚高原で鳥になろう―

塩塚スカイクラブ (SSC)

会長 鈴木邦雄



「ワァッ、飛んだ！」この感激をぜひ一度、体験してみてください





見て見て機関車だよ

○イベント（後述）の企画運営

○パラグライダーのPR

○六スクール間の連絡調整などの活動を継続しています。

SSC会員十二名の職種はさまざまですが、これが功を奏しています。一人でやれることには限りがあります。同じ職場の間ばかりだと考え方や意見が偏りやすい。しかし、タイプの違う人や職業の異なる人々の集まりは、情報を収集したり、ものの考え方を学ぶにも楽しいものがあります。時には職場で修得した技術を持ち寄った作業集団になることだって可能です。

### 仮装フェスティバル

こうして十二タイプの間が集まり企画運営しているイベントが『塩塚島人間パラグライダー仮装フェスティバル』です。今年で第五回（十一月八日開催予定）となります。四国四県から集まる有志が独自の仮装でフライトをしま

す。平成八年には、テレビ番組の『特ホウ王国』で紹介され、「トトロ、空を飛ぶ？」が特ホウ王国年間大賞に選ばれて一躍有名になったイベントです。

### 夢に向かって

パラグライダーは向かい風を利用して離陸しますが、今、塩塚高原でのパラグライダーには好都合の追い風が吹こうとしています。それが来春オープン予定で村役場が建設中の「霧の高原」です。高原から二〇〇メートルほど離れた位置にキャビンやデイキャンプ場、オートキャンプ場、バーベキューハウス、人工芝

すると、宿泊型のパラグライダー体験も可能ですし、家族連れでのレジャーも楽しめます。

今後の課題は、初心者や中級者だけでなく上級者も楽しめる高々度のランディング（着陸）場の開発です。塩塚高原の頂上からテイク・オフ（離陸）して、高度差約三〇〇メートルの位置にランディングできるようなれば、より魅力的な体験ができるようになります。

今、実現に向けて会員が活動を始めました。ご期待ください。

てきました。

そこで結成されたのが村民有志十二名によるSSCでした。いつまでも、そして誰もが「大空への夢！」を実現できるようなとの願いがありました。以来八年が経ちました。この間、

○土地所有者との交渉や借地契約

○離着陸場の草刈り

○環境美化を呼びかける看板類の設置

○SSCによるパラグライダー・スクールの開校



大空へテイク・オフ

## 瀬戸内シースクールへ ようこそ

大三島町  
瀬戸内シースクール世話人 藤原元久



トイレなど、観光客の受入れ体制づくりを急ピッチで展開しているところです。

きっかけは……

シースクールを始めるきっかけはと言うと、その環境に恵まれていたことです。回りが水のきれいな瀬戸内海であること。B&G財団を誘致し、OPディングー（ヨット）やカヌー、ローボートなどの無償貸与を受け、海岸沿いに艇庫も備えてあること。実技指導を行なう育成士がいること。これらがまず、揃っていたからだと思います。そして何よりも重要なキーワードは「交流」です。過疎化・高齢化が急速に進み、なかなか人口の定住化が見込まれない中で、交流人口の増加を目指すことが重要と考えられます。町外、島外の皆さんにマリンスポーツを体験してもらいながら、地元の人との交流を通じて大三島の良さを実感してもらいたいと思ったのです。

### 先駆者は「ODAの木」

ただのマリンスポーツの体験学習ではインパクトが弱い。何かテーマを持たせなければダメかなということ、島の良さは前述のとおり、きれいな海に囲まれており、それを守り育てていくことこそ大切だとのこと、切り口を「環境教育」に絞りました。アドバイザーとして松山国際理解教育センターの藤井誠さんを迎え、地元での環境学習を重ねていきました。

はじめに

「舞たうん」へ大三島町が登場するのは、目つ茶久しぶりのような気がしますので、少し地域の紹介をさせていただきます。

私のホームグラウンドであ

る大三島は、瀬戸内海国立公園の中でも特に美しい多島美を誇る芸予諸島のほぼ真中に位置しており、島の西半分が大三島町、そして東半分は上浦町です。古くから海の神・山の神、また戦の神として篤い信仰を集めている大山祇神社には、多くの武将たちが戦勝の祈願やお札に訪れた際に、刀や鎧・兜を奉納しており、全国で国宝や国の重要文化財に指定されているものの約八割が神社の国宝館に収蔵展示されています。

既に皆さんご存じのとおり

尾道市と今治市を結ぶ瀬戸内しまなみ海道のルート上にあり、平成十一年度の全線開通を目前に控え、観光情報機能を備えたセンター、駐車場や



海を通しての交流学習会



その頃、既に小田町では「森の学校」なるものがスタートしていました。山里であるという特性を活かし、町全体がフィールドであり、素材は町にあるものを使い、インストラクターは町民一人ひとりという具合。ちょうど、小田町のアドバイザーも藤井さんだったことから、「ODAの木プロジェクト」の中心的人物である高本師津雄さんを講師としてお招きし、地域資源の活用方法、人材の発掘などについてアドバイスをいただきました。自分の住んでいる地域への思い入れがひしひしと伝わってきて、その情熱で圧倒されるような指導でした。

環境教育では先駆的役割を担っている小田町さんには、教わる所が多かったように思います。

### 第一回大三島瀬戸内 シースクール開校

先にも申し上げたように、「交流」と「環境教育」にポイントをおいて、「大三島瀬戸内シースクール『海の冒険者』」の参加者を募集することになりました。そのためには先ず、地元スタッフを確保することが先決。環境学習をしてきた人、地元のマリンスポーツ育成士などを中心に集まってもらいました。しかし、「将来的にはどうしていききたいのか」「二過性のイベントのようなものなのか」など課題を抱えたままの船出ともなりました。もちろん、地域活性化の一助となればいいかなとの思いもあります。大義名分を抱えるとやらされているというイメージになるので、「自分たちが

ら、参加者にも喜んでもらえるように」を大事に考えたつもりです。

昨年十月十九日に第一回目のシースクール（一日、日帰りコース）を開校したところ、町外から七家族、約二十名の参加者があり、カヌーやOP、ディンギーなどのマリンスポーツ、ロープワークに砂絵などのメニューを体験してもらいました。昼食は味噌仕立ての豪華？海鮮鍋を参加者とスタッフのみんなでいただきました。幸いにも穏やかな天気

で、海水温もさほど低いこともなく、体感温度が寒くなかったので、終日楽しく過ごすことができたようです。

### 継続することが大事

シースクール修了後、参加者にアンケートをとったところ、「初めてのカヌー・ヨット体験は面白かった」と好評でしたが、「もう少しじっくり乗りたかった」「班毎の交流が少なく残念」など、前向きな多くのご意見をいただきました。一回きりのイベントにはしたくありませんし、スタッフ共々楽しめるものをつけていきたいと考えていますので、大いに参考にしたいと思えます。

小田町では「森の学校」、大三島では「海の学校」と愛媛からのアクションを全国に発信していけるように、お互い内容を充実しながら、頑張っていきたいものです。



ただ今ワクワク体験中



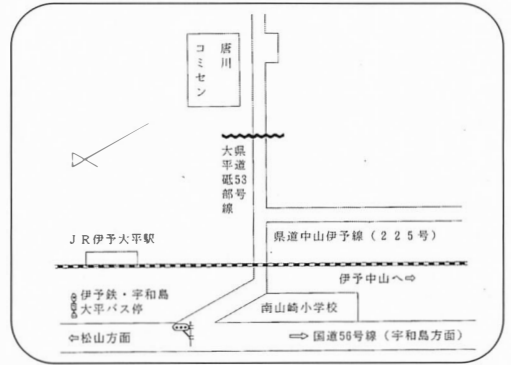
## 『唐川びわ祭りとびわ葉茶』

唐川びわ祭り実行委員長 大西 要



### 唐川地区と唐川びわ

唐川は伊予市の東南に当たる山間地で、戸数百六十戸、



びわ、かんきつ等の果樹を主体とする純農村であります。びわは、明治末期に地域の先輩が優良品種を導入、また郡中の港に共同選果場を設立するなど、共同選果販売の先駆けを行って参りました。

### 唐川びわ祭りの沿革

唐川小学校が昭和五十七年廃校となり、地域住民のいいよのない淋しさを補うため、唐川まつりが発足し催されて参りました。

平成二年、私は農協組合長

を退任し、地元の区長に就任しましたが、時に高度経済成長も終わり、バブルの崩壊、また、経済、社会の面で大きく国際化へと変革している時でもあり、地域農業にとっても集落にとっても、この嵐の中で過疎現象を来たしております。

そこで、唐川まつりに地域の活性化につながるものを入れるべきではないか、特産唐川びわの販売を加え特色を出すべきであると考え、この年より、唐川びわ祭りとなを変え再スタートを致しました。

### 唐川びわ祭りの変遷と

#### びわ葉茶の開発

びわ祭りは、伊予市、NHK、愛媛新聞社の後援をいた



びわの間から唐川を望む

だきながら、公民館と一体となって実施しており、それなりに活況を呈しておりました。ただ、びわの販売のみでは物足りないところもあり、今一つ、地域の資源を生かした特産品があればと思うようになりました。そこで思いついたのが、健康食品としてのびわ

葉茶です。

びわ葉茶は、地域でも古来より健康食品として、或いは素材として利用されており、また、文献でも紹介されており、且つ、地域では放任園にその資源が眠っておりました。

そう、これを生かして葉茶をつくってみよう、地域の人々の健康増進にもつながれば一石二鳥ではないか。

伊予地域農業改良普及センター、地域公民館の絶大な指導、支援をいただき、丸一年を費やして、平成六年五月、唐川びわ葉茶第一号が、地域の婦人老人会により生産されました。

たかがお茶ですが、この時の感激は今でも忘れることが出来ません。

平成六年、唐川びわ祭りは、名産唐川びわにこの唐川びわ葉茶が加わり、好天にも恵まれ、三千名を超える来客を迎え盛況を呈しました。

この模様は県内マスコミの取材する所となり、特にNH

Kでは全国放映され、唐川びわ祭りが更に多くの方々にご覧されることとなりました。

また、平成七年には、国際化時代の息吹を地域と共にとの発想から、県の国際交流センターにお願ひし、二十名余りの外国人留学生を受け入れ、地域の若者との交流体験学習や祭りの中での国際種飛ばし大会などを行いました。

さらに、八年には、生活改善クラブ員により、びわの木皮を原料とする唐川染の開発と販売、「かづら」を原料と

する「かづら工芸品」の販売も加わり、内容が充実して参りました。

### びわ祭りを振り返り

#### 感ずること

このびわ祭りは、公的助成はありません。全部自賄であります。

地域のオール組織の努力と支援の下に実施されております。

びわの収穫は、一時的であります。疲れ切った体に鞭を打ち、その会場の設営に、当日の運営に清い尊い汗が流されております。

私は、このプロセスが明日の唐川をつくる原動力となり、この土地に生き、またはばたく子供達が、ふるさとに限りなき愛着と誇りをもつことが出来ればとひそかに念じております。



みんな真剣、種飛ばし国際大会



びわとびわ葉茶の直売風景

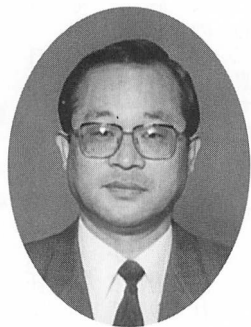
「人は良き環境の中で

健やかに育つ」とか、

平成十年の第十六回唐川びわ祭りも、六月二十一日に無事開催することが出来ました。今年も多くの方に来ていただき、大変盛況でありました。

## 浪漫街道と浪漫八橋 を活かして

河辺村役場 梅木良照



河辺村には、約十五キロの坂本龍馬脱藩の道と、橋に屋根が付いた珍しい橋が八橋あり

ります。  
これを浪漫街道、浪漫八橋と名付け、この地域資源を活かしたイベント「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」を開催し、村のイメージアップを図るとともに、都市住民との交流を図っております。

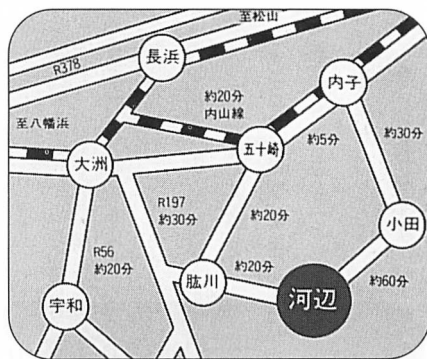
このイベントは幕末の志士坂本龍馬が脱藩した折りに通った河辺の山道を歩きながら、近代日本の礎となった龍馬の偉業をしのび、あわせてルート沿いの自然や浪漫八橋を見学し、自然の大切さを理解するとともに自身の健康増進を図ることを目的としております。

### 優秀観光地づくり

これらの取り組みが評価されてか、平成十年四月に四国で初めて「優秀観光地づくり賞」を受賞する栄に浴しました。

◆地域の文化財と自然・歴史をミックスしている。

◆高齢化・少子化に悩む過



疎地域の取り組みとして「廃校」を蘇らせた策は評価できる。

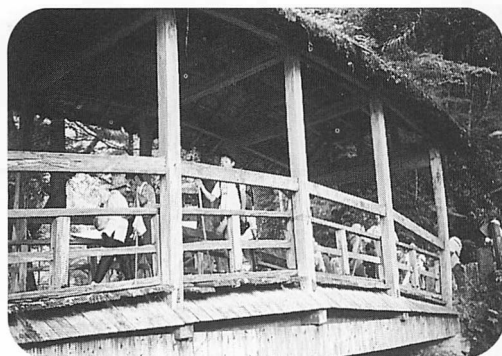
◆坂本龍馬にこだわりの道ひとすじに継続し、次々に新しいアイデアを育てた点がよい。

◆まちづくりへの取り組みは長く熱心で、行政、企業、住民が一体となった活動を評価する。

との選考評価となっており、龍馬脱藩の道や屋根付橋を活かした取り組みが高く評価されたもので、地域資源を活かしたイベントの効果大なるものがあつたろうと思えます。

### 坂本龍馬にこだわって

昭和六十三年十一月に坂本龍馬脱藩の道が解明されて以来、坂本龍馬にこだわり取り組んで参りました事業も、坂本龍馬脱藩の道の整備、道標、夜明けの道記念碑、坂本龍馬宿泊の地記念碑、坂本龍馬脱藩之日記念館、交流館才谷屋等があり、まもなく坂本龍馬ファン待望の「飛翔の像」がお目見えすることとなっております。この飛翔の像は坂本龍馬と道案内役那須俊平、一



八橋巡りコースも新設





の道百選」にも選定され、一段と盛況を極めることとなりました。

脱藩当時は、往還として人の往来も多くありました。

今では通人もわずかとなり、この道整備には多くの労力が必要となりますが、この道の整備には坂本龍馬脱藩の道保存会員を始め村民の献身的協力があり大変感謝を致しております。

第一回開催時には、定員一五〇人でスタートしたイベントではありますが、昨年は四〇〇人の参加となり嬉しくもあり大変でもあります。

このイベントは参加者を峠まで輸送することが一番の難題です。急な山道でしかも狭いためマイクロバス程度しか輸送手段として使えず、また離合場所の関係から車の台数も限られてくることから対応に苦勞しております。

昨年、何とか四〇〇人を受け入れることが出来たのは、脱藩の道オンリーコースに加え村内に八つある屋根付橋を利用して、集合地からすべての行程を歩く「脱藩の道と浪漫八橋巡り」コースを新設した

ことによるものです。

ただ準備品としての竹の皮、竹の水筒、わらじ、通行手形等を用意する必要があり、この制作には村内の老人クラブの協力を頂いており、現在のところ受け入れ出来る人数にも限りがありますが、可能な限り対応致したいとは考えております。

浪漫八橋（屋根付橋）が映える村」をキャッチフレーズとしたところであり、龍馬脱藩の道と屋根付橋は河辺村の大切な文化遺産であり、今後も河辺村のメインイベントとしてさらに充実して参りたいと考えているところです。

緒に脱藩した澤村惣之丞の脱藩姿を再現したもので、龍馬ファンにまた一つ見所が提供出来ることとなります。

このように坂本龍馬にこだわったハード施設に加え、龍馬脱藩の道フォトコンテスト

や日本のマディソン郡の橋・屋根付橋フォトコンテストを開催、わけでも解明以来取り組んでおりますイベントが、わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道”と、前夜祭龍馬を語る夕べ”で今年十回目を迎えます。年々盛況となる中、平成八年十一月には、この坂本龍馬脱藩の道が文化庁の「歴史

第一回開催時には、定員一五〇人でスタートしたイベントではありますが、昨年は四〇〇人の参加となり嬉しくもあり大変でもあります。

このイベントは参加者を峠まで輸送することが一番の難題です。急な山道でしかも狭いためマイクロバス程度しか輸送手段として使えず、ま

また、平成十年三月策定の総合整備計画で「浪漫街道（龍馬脱藩の道）」と



今年も頑張るぞ!!

## でちこんか'98 引き継がれていく音

でちこんか実行委員会  
事務局 二宮 浩



を一段とスケールアップし、前夜祭とあわせて二日間のイベントとして実施をして以来、今回で五回目を迎えます。

コンセプトは「清流」。町名にも使われている広見川を中心に、当町は数多くの河川に恵まれています。その為、いつまでも清い流れを保つとともに自然と共存できる快適な町づくりを目指そうと「清流」にスポットをあて探求しています。

「生涯学習の町」にふさわしいイベントを企画する中、平成六年度が広見町四十周年に当たることもあり、記念行事の一つとして、これまでに実施してきた物産市、愛護班まつり、健康まつりはもとより、人形劇、各種講演会など

イベントの名称である「でちこんか」は、広見町の方言で「出てきませんか」「お出でよ」という意味で、珍しいネーミングも幸いしてか問い合わせ

寄せも多く、二日間で三万人を超える集客数を誇ります。町内はもとより町外からの参加も多く、町の活性化や特産品のPR、広見町のイメージアップにと多大の効果を上げています。

このイベントの前夜祭に携わり、全国の太鼓集団との競演・邦楽ライブの運営をしているのが太鼓集団「魁」です。

### 太鼓集団「魁」の誕生

「今更、何で太鼓なの」という声も聞かれる中、八年前の二月に、太鼓集団「魁」が結成されました。集まったメンバーは、町役場の職員、水道屋、電気屋、ガス屋、画家、保母など多種多様の職種、知り合いもいれば始めて出会った人もいます。町の活性化のために、若者の定住する町づくりを推進するためにと、ふるさと創生資金を活用し募られたのです。つまり、自らが進んで町おこしを念頭において集まったのではなく、活性

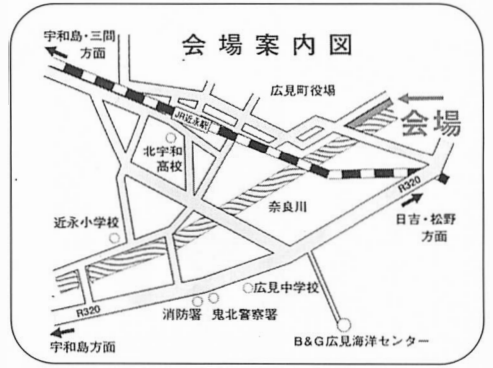
化の駒として集められた集団でした。しかし、それからというもの、週三回、何度もやめようかと思うような練習を重ね、同年十一月十八日初舞台を踏んだのです。

### 気持ちの転換

初舞台の夜、全てのメンバーが、そして裏方で支えてくれたスタッフが泣きました。感動、叩き終えた時の思いは今でも忘れません。自分たちの太鼓演奏を聴いて頂いた、みんなが感動した瞬間です。



びっくり市



「広見にはいい太鼓ができたね」そんな言葉を耳にした時、続けてきて良かったという気持ちで湧いてきました。

私たちの太鼓演奏で町の活性化ができるならと、メンバー一人一人が太鼓との出会いを大切に、人とのつながりふれあいを学びながら、様々な体験をし情熱をもって活動をしてきた成果が気持ちを変えていったのです。

### 引き継がれていく音

太鼓集団「魁」の舞台を説明すると、一つには、師であ

り渡辺洋一先生率いるプロ太鼓集団「天邪鬼」の影響を受けているところにあります。日本の伝統芸能を保存し、また、古き良きものを生かして現代に通用する古典芸能と創作され、太鼓の音楽的表現の厚みと広がり求め、その叩き出される響きは優れて楽しく、洗練された芸能であるべく演じるところにあります。

二つには、太鼓を叩く者、それぞれの個性、感性が織りなす表現・リズムにより聴く人に与える感動を変えるところにあります。感情の高ぶりひとつで音やリズムが変化し、よりエキサイティングに美しく感じられます。

三つには、郷土芸能を地元の有志の方々から教わることにより、伝統芸能の中に蓄積されているエネルギーを自らの肉体を通して新たな形に変え舞台に表現させることです。

### 後継者育成

まずは、継続をすること、

そのためには自己啓発はもちろんのこと後継者育成が重要課題です。現在二十三名のメンバーは、太鼓をこよなく愛し、広見町の太鼓だという強い意識を持ち、自分たちの叩く太鼓が町民の心に響き感動を与えるチームになろうと常々考えています。しかし、体力には限界があります。中高生女子による「乙女座」を結成し数年前まで活動をして

くれていましたが、伝統芸能として引き継いでくるといふ確信がもてません。太鼓の魅力を身体で味わい、伝えていく斬新で活力ある若者の存在が必要であります。

### 目指すもの

今、片田舎の町を活性化させるのは、大企業の誘致でもなく個人の力でもないと思います。評論家の多い町は得てして足踏みばかりで前に進みません。企画者だけの演出

では後に何も残りません。継続は力なりを基に、町民に広見の一大イベントとして定着しつつある「でちこんか」、それに携わり町の活性化を促そうとしている「魁」、各種団体、それぞれ個々の心の中に蓄積された熱き情熱を一体化し、広見町の太鼓集団「魁」広見町の「でちこんか」として町内外へアピールしたいものです。



でちこんかクライマックス（太鼓集団「魁」）



# 環境を基軸にしたまちづくり

— グラウンドワーク運動の実践的展開 —

鳥取県米子市  
王子製紙(株)米子工場

向井 哲朗



## 一. 地域の特性を生かす

「活力あるまちづくり」す

なわち地域活性化の運動を展開するにあたって、重要な事項の一つに地域特性の把握がある。「地域特性」とは、言うまでもなく地域が持っている固有の資源であり、それをみんなで掘り起こし、生かして地域活性化につなげるのである。地域資源は、歴史・文化、風土・風習、地質・地形、気象、環境等多岐にわたる。これらの過去と現状を対比し変わってきた点、問題点は何かなど、自分の地域は他に較べ何がどのように異なるのか、地域の特徴と利点、欠点を探し、そしてそれをプラス思考で展開することから始まる。

## 二. グラウンドワーク運動の展開

### 運動の展開

地域資源の活用の手法としてグラウンドワーク運動の展開がある。グラウンドワーク (Ground Work) とは、地域を構成する住民、企

業、行政の三者が協力して専門組織 (トラスト) をつくり、身近な環境 (Ground) を見直し、自ら汗を流して (Work) 地域の環境改善をしていく活動で、議論よりアクションが原則である。すなわち地域を構成する住民、企業、行政の三者がそれぞれ得意技を出し合い、お互いの立場を尊重しながら役割を認識し、地域や町内の問題に対して知恵とアイデアを出し合う。そしてともに汗を流し、作業後はみんなが缶ビールを片手に自由で気軽にコミュニケーションを図る。ここに人々との交流の場、人と人の和が出来る。美しく住みやすいまちづくりは人づくりからと言われるが、グラウンドワーク運動は自分たちの地域を魅力的で愛着のこもった環境に改善していく。すなわち、地域づくりの主体が自分たちだと

の自覚を持った市民自身の問題意識に基づく積極的かつ具体的な市民運動で、今後の主流をなすと思う。

## 三. 環境を基軸にした

### まちづくり

リサイクルを厳守し、出さない工夫と努力をすることが重要なコンセプトである今日、私が問題提起したちよつとした心くばり、気くばりで出来る「環境に優しい暮らし方 (リサイクル生活)」を住民と



割り箸を回収し紙に再生する体験学習

企業と行政が一体となって行っている、鳥取県米子市での事例をいくつか紹介したい。

捨てればただのゴミ、活かせば資源、使用済み割り箸を製紙原料にすることでゴミ減らしを提案、工場トップの理解もあり、九二年七月社員食堂から始めた。また、地元、皆生温泉の女将さんの協力を得、地域にも広げた。誰でも手身近に出来るゴミ減らしと、資源を大切に作る両面を具備していたことで、学校、ボランティア団体、飲食店、行政、企業など様々な人が加わり、米子発の「割り箸を紙に再生する運動」は点から線へ、線から面へと大きな運動のうねりの輪となつて、全国規模で展開されている。使用済み割り箸三繕でA4のコピー用紙一枚か葉書一枚に生まれ変わって日本中旅をし、割り箸を回収して下さった方と印字された形で対話できる夢とロマンを秘めている。回収した箸の量は当初月三〇〇キロほど

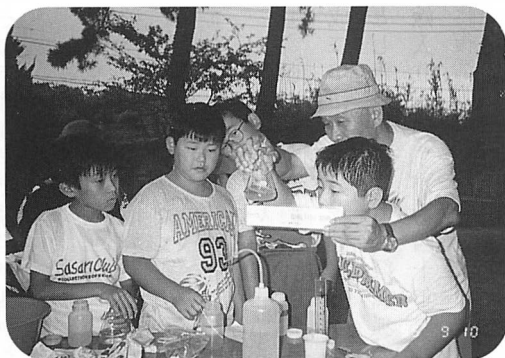
であったが、それが今では全国の多くの方のご理解とご協力によつて五〇倍の十五トンに増えた。集めた割り箸の半分が紙になるので、七・五トンが生まれ変わって旅をしている。紙にならない残りの木質は発電用ボイラの燃料に利用されるため、地球温暖化防止にも寄与できる完璧なりサイクルになっている。

また、川や湖の汚れの原因となつている台所排水を、廃パスタを利用して、浄化する方法を提案。破れてはけなくなったパスタの両脚部分を一五〜二〇cmに輪切りにし、一方の端を強く縛る。縛った部分を下にして流し台のゴミ篋にかぶせる。腰の部分は股下五cmに切つて縛り、同様に三角コーナーにかぶせることにより台所の調理くずの流出防止や水の浄化を図る。自治会や婦人会等の会合に出向き、台所排水をパスタを使って浄化する実験を行い、自分の目でその効果のほどを確認し

てもらふなど、行政も加わつて普及啓発を図るために市民運動として展開している。

台所の食べかす、調理くず等の生ゴミは肥料に還元し、ゴミの減量化を図っている。飲み残しアルコール、牛乳、ビール、ジュース等を飲んだ後の洗い水や米のとぎ汁はバケツに回収、庭木にまき肥料として還元する。

廃天ぷら油は、下水に流せば汚濁の元凶となるが、燃料となることに着目。町内の公民館やホテル、旅館に二〇



▶チビツ子環境パトロール隊への河川水質調査指導

ポリタンクを常備、ここで回収して私の工場に運び発電用ボイラの燃料にしている。硫酸黄分が含まれず廃ガスもクリンで一石三鳥にもなる。

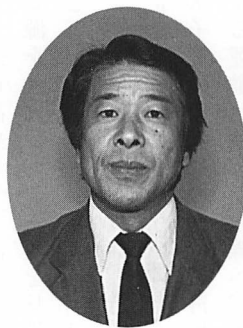
郷土の誇る天然汽水湖「中海」が今水質汚濁という成人病になやまされている。「泳げる中海、魚がたくさん住むかつてのような中海を取り戻すには」次代を担う子供たちとチビツ子環境パトロール隊を編成、町内外の環境パトロールの実施、環境美化活動、中海の水質調査等、子供たちと同じ目線で調査、研究活動も継続して行つてきている。

これらの取り組みを企業がバックアップし、行政も応援してくれるようになった。住民、企業、行政の三者が手を携えて自分達の地域を自ら汗を流してよりよくする地域再生のグラウンドワーク運動を環境改善のあらゆる分野に広げ、私達の手で確実なものとしていきたい。

# キラリ光るまち

## 狐の嫁入り行列に 似合ったまちづくり

新潟県津川町役場 後藤 九一



津川町は、かつて会津領越後国蒲原郡小川庄と呼ばれ、中世から近代にかけて会津の歴史とともに歩んできた。

一二五三年、会津芦名氏の一族により麒麟山に津川城（別名…狐尻城）が築城されると、戦略上会津の西の要衝となり重要性が増していった。また、会津街道の宿場町、阿

賀野川舟運の川港の町として、会津から大阪への回米や瀬戸内海からの塩、海産物などの交易で賑わい繁栄した。

### まちづくりの経緯

個性を活かしたまちづくりが住民と行政の協同作業で八年前より進められてきた。このきっかけとなったのが、商店街の青年たちの二つの活動である。

### 狐の嫁入り行列

その昔、津川の山には狐が住み、狐火がいたるところで目撃された。人々は狐火を見るとき、「狐の嫁入り」と呼び、

その年は豊作で縁起が良いといって喜んだ。

狐火伝説や稲荷信仰、屋敷稲荷の残る土地柄故、会津の武者行列からノウハウを学び、また金上稲荷大祭が毎年五月三日に行われていたこともあり、地域活性化策として、平成二年に商工会青年部を中心とした町民による奇祭「狐の嫁入り行列」が約四十年ぶりに復活した。

主役の花嫁花婿はその年に結婚予定のカップルを公募し、公開審査にて一組を決定する。

「午後六時頃、住吉神社の境内にて旅立ちの儀を終え、白むく姿に狐顔に化身した花嫁一行一〇八匹の狐が花婿の元へと旅立つ。道中の途中で仲人の出迎えの儀。ここでは、保育園児扮する子狐のお祝い踊りや好物の特大油揚げが振舞われる。そして、橋の上でようやく花婿と対面。二人は川原に降り、特設ステージで結婚の儀を行なう。三三九度の杯をかわし、大盃の儀、祝

い太鼓が披露され、古式ゆかしく厳かに取り行われる。

祭りもいよいよクライマックス…麒麟山の稜線に狐火が灯り、花嫁花婿を呼ぶコーン・コーンという狐の鳴き声に誘われるかのように霧がたちこめる中、川舟で川を渡り、麒麟山の金上稲荷へと嫁いでいき、幽玄の世界に幕を閉じる」といった旧街道や常浪川、麒麟山の自然を舞台にした時代絵巻であり、平成三年に（財）地域活性化センター主催のイベント賞「優良賞」に選ばれ、平成七年には（財）サントリー文化財団の地域文化賞を受賞す



狐の嫁入り行列

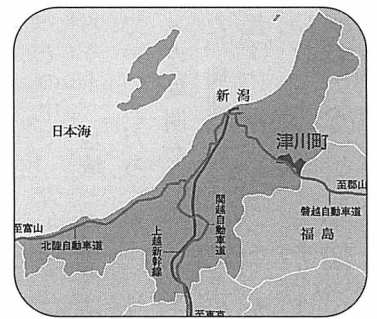


るなど町おこしの起爆剤とな  
って効果を上げている。

## 旧本町再生倶楽部の提言

過疎化、高齢化の中、悲観  
的な尺度や都会と比較した尺  
度で心の過疎化が内在する一  
方、自然は豊かでも活力衰退  
に危機感を持つ中心商店街の  
青壮年が「旧本町再生倶楽部」  
を組織した。そして昭和六十  
三年から週二回ずつ、のべ一  
八〇回に及ぶ早朝勉強会の成  
果を「津川町ルネッサンス」  
という報告書にまとめ、提案  
してきた。

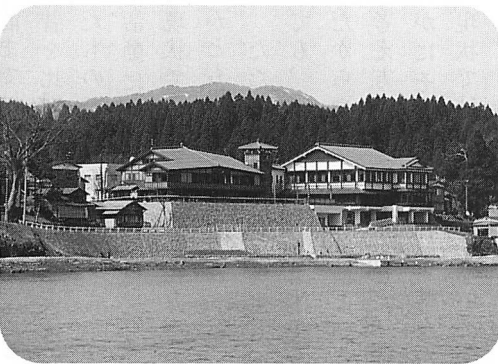
商業診断報告書では、基本  
的な戦略として、パイパス沿  
いへの共同店舗を核とした新  
しい商店街区の形成を提言さ  
れたが、画一的な手法に疑問  
を持ち、あえて逆手にとった。  
町の盛衰は商店街の盛衰に相  
関し、そこに住む人々の人間  
味に富んだ商業空間づくりと  
町の歴史性、文化性によって  
もたらされる感動を大切にし、  
生活の匂いのする街をつくり



たい構想である。地域住民に  
よって、精力的に情熱を注い  
でいることが、行政はもとよ  
り町民の心を動かした。

## パートナーシップ型の まちづくり

この内発的なまちおこし運  
動と連動して、町では、平成  
三年度に建設省のまちなみデ  
ザイン推進事業を導入し、地  
域住民を主体とした街なみ景  
観懇談会を契機に、翌年度に  
は国土庁の地域個性形成事業  
による町民公募のまちなみづ  
くり推進協議会を組織し、活  
動中である。それぞれ年度ご  
とに資源の掘りおこし、景観  
づくりの基本計画や基準(案)、



阿賀物語村

景観条例(素案)をワークシ  
ョップ活動でまとめ、プログ  
ラムの策定、啓発活動となる  
シンポジウムの開催、景観パ  
ンフレットの配付など継続的  
な取り組みをしている。

また、物語性を秘めたテー  
マ「狐の嫁入り行列に似合っ  
たまちづくり」を掲げ、活動  
拠点となる「阿賀物語村」が  
開村した。村内は狐の嫁入り  
屋敷を中核として、ふるさと  
交流川屋敷、水景広場で構成  
されている。昨年は二組の結  
婚式が挙行され、嫁入り舟の

就航で川面を賑わすなど、水  
に親しむ気運が高まっている。

一方、街道沿いの旧本町地  
区では街づくり協定が締結さ  
れ、町の個性である雁木がんぎを活  
かした修景が進められている。

町民の中には温度差がある  
にせよ、自分達の汗で地域を  
良くしたいと燃える人達が増  
えており、多様な波及効果が  
あらわれている。

## おわりに

昨年には待望の磐越自動車  
道が開通し、日本海と太平洋  
を結ぶ全線が開通した。関西、  
東北、関東をネットワークす  
る大動脈ができあがり、さま  
ざまな面での交流が期待され  
る。この全通が地域活性化に  
結び付くか、あるいは単なる  
通過点になるかは、長期的な  
視点にたった継続であり、か  
つての繁栄、文化を形だけで  
なく、人々の心に響くよう、  
一人一人の物語の舞台を大切  
にし、温故知新を心がけたい。

「やっててよかったです青年団」といっても、どこかのコマーシャルのマネではないですよ。この言葉のとおり、私にとって青年団とは掛け替えのないもので、生活の一部と言っても過言ではありません。実際、私の生活は仕事と青年団活動の繰り返しです。大好きだから、土・日曜日はおろか平日の深夜まで、プライベートの時間がほとんどないにもかかわらず、苦に感じることはありません。

「やっててよかったです青年団」といっても、どこかのコマーシャルのマネではないですよ。この言葉のとおり、私にとって青年団とは掛け替えのないもので、生活の一部と言っても過言ではありません。実際、私の生活は仕事と青年団活動の繰り返しです。大好きだから、土・日曜日はおろか平日の深夜まで、プライベートの時間がほとんどないにもかかわらず、苦に感じることはありません。



## 紀伊野勇人

三瓶町

## 『青年団と私』

せんし、気にもなりません。仕事にしても、職場の上司や先輩たちのもと、学ぶことが多く充実しています。なりによる私の青年団活動に対する職場の皆さんの理解が嬉しいです。

このように、私にとって掛け替えのない青年団活動ですが、なぜここまでめり込んだのかということと併せて、活動の重要性を考えてみました。その中で、青年団とは何だろう……。地域との連携はこれでもいいのだろうか……。等々様々な疑問が感じられます。また、周囲からは、「最近の若い者は」「昔は良かった」等といったことをよく言われます。このようなことを言われると、

前まではカチンときて、「今と昔を比べられても」と反抗したものです。しかし、青年団活動に熱心に取り組み中で、現状では言われても仕方ないかとも思えてきました。

ただ、地域活動一つをとっても、ボランティア団体なのだからやって当たり前という考え方は腑に落ちません。確かにそうかもしれないですが、現状ではそうもいかないのです。最近の若い人たちは、団体活動やボランティア活動を嫌い、自分のやりたいことだけをやる傾向にあります。その為、上から押さえ付けてばかりではかえってマイナスになっちゃいます。このような青年の行動自体、納得は出来ないので……。私としては、やりたいことをやる上で、地域に役立つような行事と結び付け、地元の活性化につなげられればと考えます。

さて、本題である「青年団と私」についてですが、青年団と私の出会いは地元で行わ

れた交流会に参加したことにより始まりました。先輩の誘いで参加した交流会が青年団に対する意識を大きく変貌させたのです。とにかく、楽しいの一言だった交流会。初めて会う人ばかりなのに、すぐに意気投合できた喜び、先輩には感謝したものです。

そして現在、私は県団の役員をさせていただいております。これを機に、私が青年団に対して感じた喜び、楽しさを一人でも多くの青年に味わっていただけるよう、今後も努力していきます。個々の個性を大切に生かし、団体行動の大切さを学ぶと共に、一人では出来ないことも同世代の青年が集えば出来るということを知っていただきたいと思います。

最後になりましたが、私たち青年団を理解し陰ながら見守っていただいている地域住民の皆さんをはじめ、各団員の職場の皆さんに、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

# 『おばさんの野望』

松山市

立花 英美



私は、古着屋さんで働きながら英語を教える、歌うたいです。大のバンド好きで、カッコーバンドのコンサートを開いたり、おもしろいイベントをしています。もはや『若くはない』独身女性、おまけに鼻ピアスあけてインドカブレ、救いようなない有様です。

さて、そんな「イカレた」見るからにうさん臭い「おばさん」は、名刺も肩書きもななく、世間的には、かなりきつ



い立場にも立たされます。例えば、公共の施設を借りたりする時などは大変です。何が大変かというのと、私などは「どこの馬の骨とも分からない」身分なので、身分がちやんと分かりやすい人々の協力が、いつでも必要になってしまうのです。情けないと思ったらありやしない。でも、こんなことではヘコたれない。もつとひどい時には、内容を説明する私の顔も見ずに、「前例がない」の一コトで門前払いをくらったこともあります。他にも、ただ、外国人の友達とコンサートを開きたかっただけなのに、『国際親善、文化交流のための軽音楽コンサート』（音楽を通じて、異文化交流を

図る）などという、偉そうなお題目が「目的」でなければならなかった例もあつたりします。

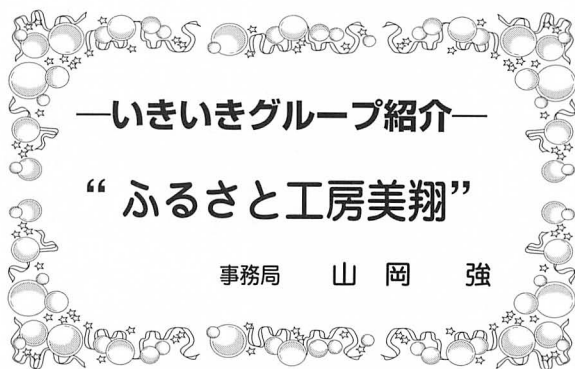
私は、こんなことくらいでヘコたれたりはいませんが、いろんな『嘘』を、いろんなところでついでにいる自分は、時々いやになります。『嘘も方便』なのか、ただの『世渡り下手』なのか分かりませんが、私にとって『公的』なものとの関わりが、一番難しい様です。

さて、この手の困難と精神的苦痛を味わっても、「イカレたおばさん」は、次々に、やりたいことが湧いてきます。山口県の知人達は、もう始めています。廃校利用による、民間の文化発信です。去年初めて参加させてもらったそのイベントは、心温まるものでした。過疎の村で、地元の人々と有志の人々で廃校を借り、そこで、焼き物教室やコンサートを開いたり、一日中いろんな催しものがありまし

た。そこまでこぎつけるのに、何年もの歳月を要したと言います。しかし、その中の誰も名刺を持ってはいませんでした。

さて、ここ愛媛でも、もつと何かできると思っています。私は、地道に服を売りつつの、英語力も磨きつつの、いろんな人に会ったりもしつつ、次なる「チャンス」をうかがっています。インターネットも味方です。「イカレたおばさん」の次なる「野望」は、「文化発信」とか「文化交流」の『基地』づくりです。おもしろそうでしょ？

嘘のつけない皆さん、興味があつたら私とつるんで下さい。「イカレ」ですが、結構やっています。それでは、また会いましょう。



## —いきいきグループ紹介—

# “ふるさと工房美翔”

事務局 山岡 強



### 「若夢者」から「美翔」へ：

それまで第二期生活文化若者塾の流れを引き継いでいた「御荘若夢者塾（十四人）」は、事務局を教育委員会に置き、

ふるさと御荘の素晴らしさを発見するべく様々な活動を行っていました。ところが、平成六年六月、町当局の事情により「塾」は事実上解散、その活動は再び展開されることはいないと思われました。

しかし、当時のメンバーにとっては、“まちづくり活動”の楽しさがだんだんと分かっていた頃で、当初から町に思いを寄せるメンバーが多かったこともあり、平成七年一月、その頃のメンバーが中心になって一念発起し、任意の団体「ふるさと工房美翔（二十三人）」が誕生しました。

行政の枠にとらわれず、自分たちのやりたいことを少しでも実現しようと、“まちづくり活動”を再開したわけですが、そんな私たちを取り巻く環境は非常に悪く、前途多難なスタートではありましたが、「自分たちの手で、この町を何とか良くしたい」という思いから、幾多の障害をも乗り越えて今日まで活動してきました

た。

私達の活動の原点となっているのは、前出の「御荘若夢者塾」時代に培われた“まちづくり活動”に対する理念思想であったということこそは言うまでもありませんが、何よりも、逆境にもめげる事のない、町に対する強い愛情を持つたメンバーに恵まれていたということに他ならないと思います。

### これまでしてきたこと：

私達がしている活動というのは、地域固有の資源を活用したものが多いというのが特徴です。平成七年十月、県と町の寛大な理解を得て実施することのできた「ペインティング事業」もその一つです。町内の小中学生より募集した、

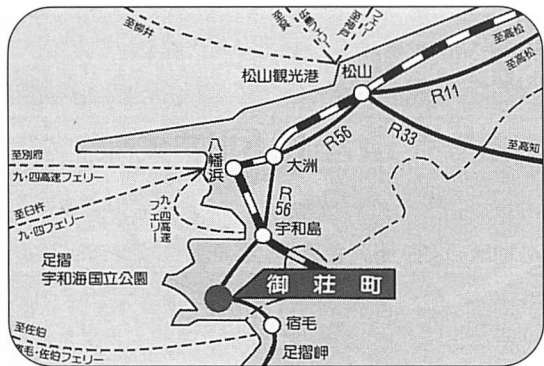


僧都川ペインティング

町をPRする絵の中から三枚を選び、町中央を流れる僧都川南岸の堤防に、町民約三〇〇人の参加をいただいて、忠実にその絵をペインティングしました。同所は河川敷公園なので訪れる町民も多く、ちよっとしたお勧めスポットにもなっているようです。

また、平成九年六月には、天然色鮮やかな町特産の緋扇貝を使用した壁飾りを制作しました。これは道の駅「みしようMIC」のオープンに合わせて寄贈させていただいたのですが、同所を利用する皆さんへの緋扇貝のよいPRになっっています。

その他にも、国道五六号線“自在園”での運動会や盆踊り大会へのボランティア参加。町内外の団体との交流会等も



◀ふるさと工房レリーフ

### 夢を現実に…

います。

私達が行うまちづくり活動というのは、予算的にも、その行動範囲にも限界がありません。しかし、いくら小さな活動でも人の心は動かせるし、その積み重ねにより人は変わってくると信じています。人はよく机上の論理でまちづくりを語りますが、それによりどれだけの町が、そして人が変わってきたらどうかと考えさせられます。私達の活動の根底にある理念は、実践あるのみの一言です。そしてそこに間違いなく存在するのは、ただやらされている活動ではなく、どうせやるなら、自分達が楽しくなくてはならないという考え方です。このような活動を通じて、昨日よりも今日、今日よりも明日と、自分の住む町を好きになれればいいと思います。

積極的に行っています。さらに、御荘夏祭りへのスタッフとしての参加も恒例となっています。主にダンスパレード部門の企画運営を担当していますが、その様子は昨年テレビ番組でも紹介されました。

### まちづくりの

### 新たなネタ探し…

皆さんは御荘トッポ話をご存じでしょうか。御荘トッポ話とは、遠い昔、藩政時代の苦しく貧しい生活を自ら慰め

るために残された、郷土の民俗文化です。面白おかしく出まかせを言い、人々をアツと笑わせるこのトッポ話の歴史を探ることで、御荘の歴史をも再発見できそうです。私達が今取り組んでいる活動は、この御荘トッポ話の現代版を制作することです。古くから伝わるトッポ話を收集整理すると同時に、そのトッポ話の平成バージョンを独自に創作し、私達なりの新しい歴史を生み出せたらいいと考えて





## 夢は自給自足

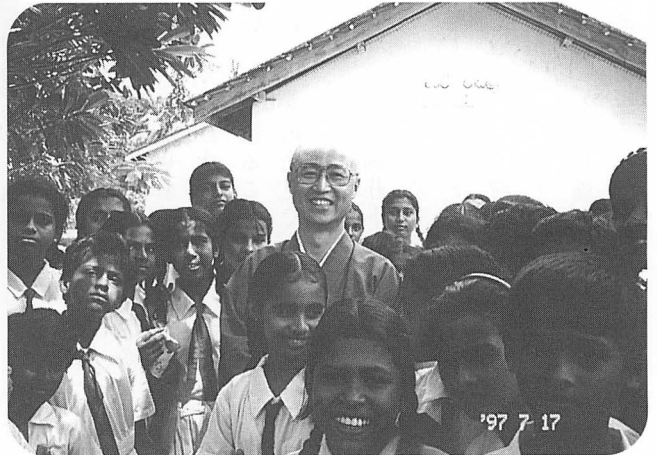
平成四年にまちづくり総合センターの指導を受けてつくられた「源流」の会も、年々一つのテーマのもとにがんばってきました。

「地域の見直し」に始まり、「炭焼き」「水」「食」と、気付くと田舎に住む私達がそこできかに楽しむか発見の作業で

あったように思います。炭や竹酢液の商品による収益で、庁舎に交通安全のイルミネーションや、中央分離帯に花の植栽を行ってききました。

蒼社川「源流の森」の植林も四回を数え、営林署をはじめ今治市職員、ライオンズクラブ、愛媛大農学部学生と、その輪が少しずつですが広がっています。

個人的なことでは、寺でミツバチを飼いだし、古代米を植えたり、蕎麦打ちを始めたりと自給自足の生活を夢見ています。かつて四季の訪れにそれぞれの楽しみがありました。今は一つの季節をあげるならば迷わず春と答えるでしょう。秋に山から集めた木の実が一斉に芽ぶき、ふきのとう、たらの芽、山うど、わらび、いたどり、月々に食卓を飾る山の幸に田舎の生活を堪能しています。



真中の笑顔が小山田さん

## 世界に向かう目

昨年はスリランカの孤児院に行き、子供等と一緒に井戸を掘ってきました。一日の終わりに、私が泥で汚れた手足を洗おうとすると、子供らは競って足の泥を流してくれました。小さな子が別れの時、ポケットから出した小石を日本まで持って行くように言います。本当のプレゼントを貰

った気持ちがありました。また今年も、中国へ育英基金を届けに同行させてもらいました。わずかなお金ですが、中国では、数十人の子供が一年間学校へ通うことが出来るのです。少しでも無駄な生活をなくさねばと思いました。

## 世界遺産に向けて

さて、日本での町おこし運動も、世界の中での日本の視点を持たなくてはと、数年前より、「四国八十八ヶ所の遍路文化」をユネスコの世界文化遺産に登録しようと、運動を起こしてまいりました。

今日の日本は、物質的な豊かさにおいては世界でも有数の国となりましたが、この数十年の環境の変化は、かつてないほどの大きなものがあります。人間が作り出した汚染物質が確実に地球全体を覆っています。心の豊かさを感じるところか年に二万数千人の自殺者を出しています。

しかし、そのような厳しい

現実の中にも、阪神大震災や重油流出事故のボランティア活動にみられたように、優しい一面をも持っています。

このような人に対する思いやり、環境に対する心づかいは、四国の地において、千二百年の長い時間で育まれたものです。

それは遍路に対する食事や宿のお接待であり、季節ごとの千二百キロに及ぶ道の管理や草刈りであります。現在も年間十数万万人の人々が、自動車や徒歩で訪れています。車ならば十日前後、徒走遍路ですと二ヶ月近くかかります。

遍路は、人との出会いに勇気付けられ、自然の中で癒されてのち、めまぐるしく変化していく日常へともどって行きます。

一昨年には関東にも八十八ヶ所が出来、ミニ四国といわ

れるものは九州から北海道まで全国に及びます。昨年、名古屋のデパートで催したお砂踏みには、半月間で十五万人の人の出を見ました。

四国に住む私達にとって、遍路姿の白装束は何んの違和



子供達と井戸掘りに挑戦

感もないのですが、そもそもは死に装束なのです。人が病み疲れた時、その日常から決別し、四国の自然の中で癒されて帰って行く。人生は遍路

そのもの、また遍路は人生そのものといえましょう。

厳しい山坂、疲れや空腹の中で受ける人の情け、そんな四国の魅力に取り付かれた人は、十周

百周と終わりなく遍路は続くのです。

世界でもまれな循環する聖地、また、驚異的な復興を遂げた日本にその地があることは、世界の遺産といえましょう。この運動をまさにエンドレスに続けることが、



みんな素敵な笑顔です

今の私の旅でもあります。

「色即是空」・・・

合掌



## — 研究員レポート —

### 第16回逆手塾に参加して

研究員 小川 龍児

の私にとっては、とてもインパクトの大きい「体験」であった。今でもまだ体内に、余韻が残っているようである。

私は、平成十年四月より「まちセン」の研究員を拝命しているが、当センターの目的は、「まちづくりに関する情報の収集加工および提供、並びにまちづくりのために必要な調査研究・活力と個性に溢れた地域社会づくりに寄与することを目的とする。」と、謳われていることを重々承知はしているものの、実際のところは、一体どんな仕事を、どのようにすればよいものか？と、自問自答の毎日であった。

現在の私には、まちづくりの秘訣・技術・術も、実践的な経験等も皆無の状況であるが、今回の「逆手塾」を突破口に、少しでもまちづくり・まちおこしの醍醐味を共有できるような頑張りたいと思う。

さて、当センター諸氏の「逆手塾」という所は、兎に角、

行ってみりゃわかるけんね！」という言葉に送られ、期待と不安に胸を締めかせ六月十三日正午前、総領町にある、元小学校改造の研修施設『ふさと田総』に到着した。

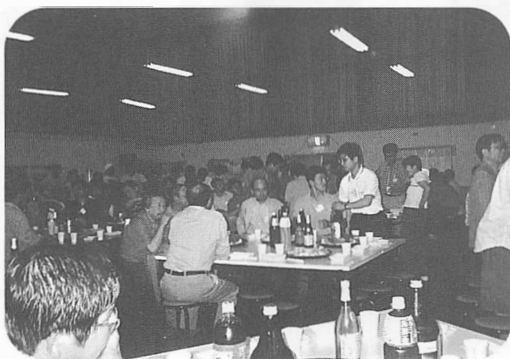
#### 輝いていた逆手塾

開会まで、一時間半前というのに、駐車場の校庭には、既に全国各地のナンバプレートを着けた、多くの車で埋まっていた。車から降りて受付を済ませ、続々と会場入りする塾生の面々はというと、老若男女様々であるが、共通して感じたことは、皆さんとても明るくて、優しく、目が輝いていた事であった。

会場内は、開会前から既にエネルギーが溢れる空気感に覆われていたが、年齢も住む所も仕事も違う様々な人々が、全国から「山の奥の町」に、殆ど自腹で一七〇余名も参加するのには驚きであった。

一体、どんな「会議?」「研修?」「セミナー?」が、始まるのだろうかと思案していたら、隣席のS氏は高齡にも拘らず、前日の真夜中に熊本を出発して夜通し運転してきたとの事であり、然も毎年参加するのを楽しみにしているとの話であったが、実際に参加してみても、皆さんの熱い思いがひたひたと伝わってくるようであった。

「逆手塾」の案内書には、『ここは人祭です。夢祭です。人源がご馳走の逆手塾へ是非チャレンジを!』と謳われており、主催者・参加者、どの



「人源がごちそう」の時間

（財）愛媛県まちづくり総合センターでの、記念すべき県外初出張は、広島県総領町で開催された、過疎を逆手にとる会主催の「第十六回逆手塾」であった。

#### 初めての県外出張

此の塾のユニークさは、まちづくりの世界ではいまさら申すまでもないが、初体験者

人・グループもパワーがみなぎっており、情熱家集団の様であった。

「研修？」は、リレー講演からスタートし、「人源がご馳走」、「人源の緑日」、「輝爆剤交換会、過激な過激なまとめ」という具合に非常にユニークなタイトルがついていたが、決して半端なものではなく、実に奥の深い、刺激的、尚且つ不可思議な世界なのである。面白くて、それでいて真面目な世界なのであるが、そのアンバランスが絶妙である。

受講者は、普通「受動的」な姿勢が多いが、此処では全員参加・全員主役にもなり得るところが素晴らしい！そして、まちづくりに携わっている、全国の輝いている人々と知り合える場でもあった。

## すべてはあなたの 一歩から

此処で、特に心惹かれた言葉がある。それは、『夢』それが輝爆剤 人は 夢がなければ

ば学ばない』『すべては あなたの夢から始まる すべてはあなたの一歩から』・・・ご存じ和田芳治氏の言葉であるが、「最初は、一人の夢や一歩からスタートし、一〇〇人の一歩よりも一人の百歩があれば現況を変える事ができる！」と、いうことを述べられているが、重要なのは各人が地域の中で自分の仕事を通して、何ができるか、何をすべきかを問直し、立ち上がってゆく事であろう。地域づくり、まちづくりの原点を示す言葉であると思う。

## 輝く人づくり

また、今回のテーマである「輝く人づくり」について、教育環境問題等を切り口に、各ゲストより、どのような人間を育て、どう教育をしたらよいかなどの問題提起や、実践報告がなされた。

特に、黒田明憲氏による「野の教育塾」については、学校の先生とまちづくり関係者

の応援で、塾が作られ心や人間復権のための、教育創造の取組みがなされている事などが、紹介された。

「ふるさと」を創る教育とは、「野の教育」である事に『こだわり』を続けられている。

また我々は、「ふる里を捨てさせる教育」をやっているのではないのか、という指摘があり「都市が、東京がいい」という、物差しを変え、ふる里で命を輝かす生き方もあるのだという実践例の報告があった。「ここが地球のど真中」という発想の独自性に「過疎を逆手にとる会」の神髄に、触れたような気がした。

今回の「逆手塾」の二日目は『輝爆剤六輔参上』という事で、特別ゲスト永六輔氏の登場となった。

氏による語りは、日常の何でもない出来事や話題を、こだわりを持って、刺激的に、感動的に、面白可笑しく、時には元気付けてくれる・・・という具合である。

会場の全員が、永さんを二分に「しゃぶらせて」もらった。



輝爆剤六輔氏参上

## おわりに

日頃、平穩に過ぎてゆく生活の中では得られない、刺激的な二日間であった。

「一期一会」という言葉があるが、「逆手塾」へ来れば全国の、まちづくりに情熱を燃やしている、多くの人々に会える事ができる。また、新たな出会いを期して、ネットワークの構築に努めてゆきたいと思う。



## — 研究員レポート —

### 自分発見の旅へ

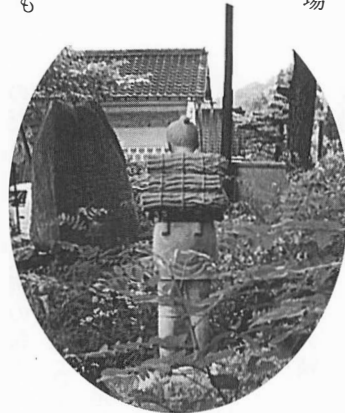
研究員 檜垣 明宏

#### はじめに

平成十年が明けて間もなく、私の弓削町役場への新規採用が決まりました。二年間、公民館（社会教育）で臨時職員として勤務しましたが、役場で働いて行くことでさえも、不安と期待が交錯していた中、私に追い討ちをかけるかのよう

に、いきなり二年間の松山「（財）愛媛県まちづくり総合センター」への派遣が言い渡されました。しかし、その瞬間、「まだまだ未熟な私にとつていいチャンスであり、もう一度自分自身を見つめ直すとともに、何か再発見できるのではないか」と思い、その場で決心し返事をしました。出発の数日前、助役と話をする機会がありました。話の内容は、「まだ、何にも染まっていない真っ白のまま、しっかりと勉強してきなさい。」というものでした。その時、私は思いました。「外に出て自分のま

ちを第三者のような立場から見つめ直すことも大切なのではないだろうか。また、まちセンで、できるだけ多くのものを経験し、吸収し、多くの色の絵の具を自分に加えていき、真っ白のキャンパスに多くの下書きを描いて帰ろう。そして、自分のまちに帰ってからじっくりと色付けしていこう。」と…。



二宮金次郎のようにボクも…

四月一日、私は役場で辞令をいただき、弓削大橋を後にしながら松山へ向かいました。そして、なんとか昼過ぎに到着し、不安と緊張感が高まる中、まちセンのドアを叩きま

本当に基礎の基礎から勉強していくしかありませんでした。先輩方が言われるに、「いろいろな資料を読むことも大切だけど、まず人に会って話すことが大切だよ」ということを教えていただきました。

そして、まずまちセンの運営委員でもあり、全国でもユニークなまちづくりを推進している双海町の若松さんを着任の挨拶も兼ねて訪ねました。若松さんは温かく、にこやかに私たちを迎え入れてくれました。そしてお話を伺うことができました。その話の中に、とても印象に残る言葉がありました。それは、「夢は持つていれば必ず叶えることができる。夢は持ち続けるよ。」という言葉でした。そういえば、自分の夢って何だったんだろうと、いきなり自分を見つめ直すことになりました。曖昧で中途半端な夢しか持っていなかった自分が情けなく、恥ずかしく思いました。そして、自分の第一歩としてはっきり

#### 「夢」持っていますか？

「まちづくり」というものを、そんなに深く真剣に考えたことのなかった私にとって、



とした夢を見つけることから始めることにしました。

## 広い世の中

さて、皆さんは愛媛県下の市町村の場所と名前がすべてわかりますか？私のような島嶼部の人間にとって、松山へ出張で来ることがあっても、

よっぽど興味がない限りその他の市町村へ足を伸ばすことはめったにありません。仕事を始めて、いくつかの資料を見ていたとき、無知な私は愛媛県人でありながら聞いたこともない市町村がいくつかありました。

そして、まちセンに来てから三か月ちよつとになります。が、いくつかのまちへ行きましました。その各々で、オリジナリティーあふれる施設があったり、まちづくりが展開されていることに驚かされるとともに、「おっ！愛媛県おもしろいな」と思われました。

今まで、自分自身低く狭い視点でしかものを見ていな

かったし、多くのことを気付かず見過ごし、そして通り過ぎてしまっていたことがわかってきました。今後、時には「視点」ではなく高いところから広い「視野」でものを観てみることも心がけていきたいと思えます。

## 基本、それは「ひと」

まちセンに来て、「まちづくりは、ひとづくり（自分づくり）」という言葉をよく耳にします。私は、今まさに、新しい自分づくり（自己啓発）に取り組み始めたところです。

まちづくり先進地には、必ずと言っていいほど、「仕掛人」といわれる方々がいます。私が見たままに会った仕掛人の方たちは、次のような共通点を持っていました。まず第一に、ふるさとを細かいところまで観て地域の特徴や問題点を見つける「目」があります。第二に、それをどうやって良くしていこうかという創造・アイデアを思い浮かべること

のできるやわらかい「頭」があります。第三に、それを仕掛けるだけではなく、実行に移していける実践力・行動力・軽いフットワークいわば「足」があります。第四に、行動をとる仲間を大切にしたいという思いやり、上下の関係なしに付き合えるのできる（酒を酌み交わせる）協調性、いわゆる「和」があります。

第五に、人を寄せ付ける「人柄」があります。第六に、県内外を問わず、すごいネットワークを持つ「人脈」があります。そしてなにより、ふるさとを思う「愛」があります。

今後、私は自分づくりをしていくにあたって、始めたの自分には、もつといろいろなものを吸収できる可能性があると

を信じて以上のようなことに自分のオリジナリティを加えながらゆつくりと時間をかけて一つずつ貧欲に勉強し、ものにしていきたいと思っています。そしてなにより、ふるさとを愛する気持ちを、持ち続けながら、少しずつ下書きを描いていきたいと思えます。



弓削大橋を背に、いざ出発

# “MY TOWN,,らおっちゃんく”

## 歩キ目デス & 足ラテス



第四弾

岡崎 直司



さて、そろそろ受講生諸君も、ウォッチングのコツみたいなものが分りかけてきたらどうか。

今回のテーマは植木鉢。

町歩きをしていると、それはもう、様々な植木鉢たちと出会います。人は、本能的にどこかで緑を求めている動物だ、という実態に気がきます。土地の少ない町中なら尚のこと。下町っぽい住宅密集地が狙い目でしょうか。

例の赤茶けた素焼きのヤツは、余りに至極当然なもので、路上観察では割愛。変わりダネを探します。まずはこれからいきましょう。

### ① 煉炭火鉢

丸んた

「コリヤ懐かしい」……とまあ感慨にふける年代と、さ程関心を示さない年代とに、ハッキリと分かれる物件ではあります。煉炭火鉢の改訂版。これがあった、若い人達には、この煉炭が通じない。ややもすれば、火鉢だつて通じない。(炭を固めた、レンコン状の穴の空いたものが煉炭)

確か、昭和四〇年代頃まで現役で活躍していたハズの彼らたちだが、いつの間にか、



トンと我々の身の回りから姿を消していた。電気ストーブやガスストーブ、あるいは石油ストーブにファンヒーター。そうした暖房器具の変遷と共に次第に駆逐されていった物たちです。

しかし、ただ置いておくには結構場所を取る。従つて、無用の長物化をしていった彼らたちの次なる人生は、屋内から屋外へ。こうして植木鉢としての第二の人生を歩むこ

とになった次第。

火鉢から植木鉢へ。鉢仲間とは言え、思い切ったトラバユです。寒い時期に活躍していた身としては、南国系のソテツが植えられている皮肉を一体どう感じているのやら、我々には知る由もありません。こうした火鉢物件は意外とよく見つかるので、頑張つてそれぞれの町でも探してみて下さい。

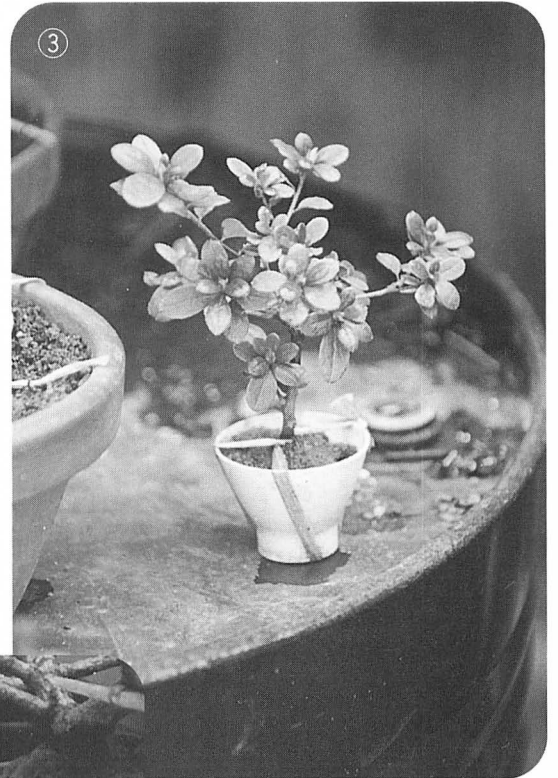
## ② ヤカン

恐らく、穴が空いたか何かで使えなくなったのでありましょう。植木鉢への転身は見事です。何故かって？。穴が空いてりゃ水抜きになるし、本物の植木鉢より断然軽いし、



第一取っ手が付いてるから持ち運びに便利です。巧みに利点を応用したアイデアは流石です。

やはり水をやる時は、この場合ジョロではなく、湯呑み



が似合うかも。私は、こんなのはアルマイト思っていたら、アリマシタ。

## ③ 盃 (さかずき)

これは極小の植木鉢だ。プラスチックに立派なサツキが植えられてます。倒れないようにヒモで結わえて。多分、ワンカップ大関か何かのフタでしょう。この家主は、余程几帳面な性格か、凝り性です。しかも下戸ではない、と見た。

## ④ 缶ビール

出ました、アサヒドライ五〇〇 ml アルミ缶。

日本酒党も居ればビール党だって頑張ってます。こうなりやヤケクソ、何でも植木鉢にしてもえ、そんな意欲がみなぎってます。一本空けた



勢いで作ったのかもしれない。

これらの他にも、実際町には、至る所に百態百様の植木鉢がころがっていて、それは飽きません。じっくり観察して、腕を、いや目を磨きましよう。

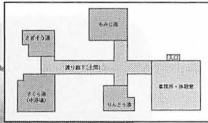
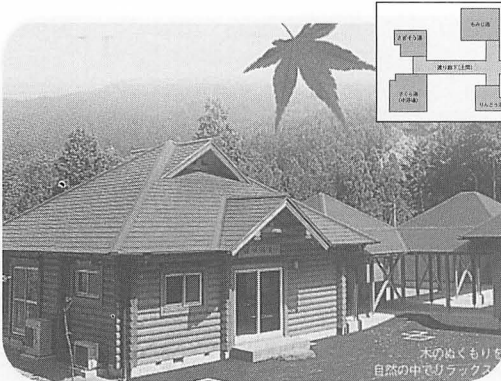
木立ちの館  
『祓川温泉』  
にどうぞ  
津島町

篠山県立自然公園に近い緑豊かな自然の中に「祓川温泉」がオープンしました。

静かな木立ちの中、木のぬくもりを大切に考えたロジジ風の館は休憩室がログハウスとなっており、湯の中でリラククスした体にやすらぎを与えてくれます。

永い時を経て湧き出でし神の泉につかれば、諸々のけがれが祓われるといいます。硫黄の効用が素肌潤いを与え、身も心もほぐしてくれます。

そうめん流し、山菜とり、特産品コーナーも計画中です。家族連れ、友だちと出かけてください。



〈営業時間〉

午前十一時～午後九時

(十一月～三月は午後八時まで)

〈定休日〉

毎月第三木曜日

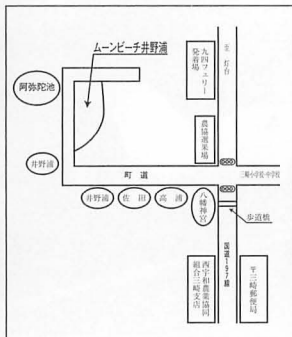
及び十二月三十一日～一月一日

〈問い合わせ先〉

☎ (〇八九五) 三エー〇三三三

海が流れる町に  
海水浴場誕生  
《ムーンビーチ井野浦》  
三崎町

紺碧の海を自慢する佐田岬半島に、海水浴場がオープンしました。三崎町には自然の海岸で泳げる場所が随所にあります。海水浴場として施設が整備されたのは《ムーンビーチ井野浦》だけです。他では泳げない天候(荒波)でも泳ぐことができ、駐車場、更衣室、シャワー等も無料です。キャンプ場も整備されています。なによりも海と砂浜がきれいであることが自慢です。あつーい夏の思い出をムーンビーチ井野浦で！  
月のようなこの海水浴場は三崎町三崎(国道一九七号線)から約三、五km南方に位置しています。



〈海開き〉

七月四日

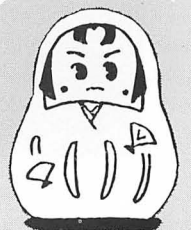
(土曜日)

キャンプ場

利用も同時に受付。

〈問い合わせ先〉

☎ (〇八九四) 五四〇二二三



## お知らせその1

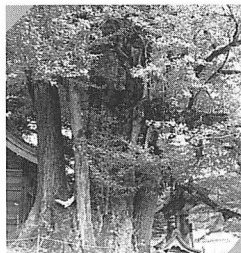
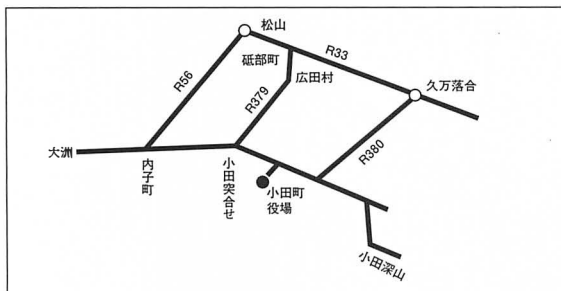
# 『MY TOWN うおっちゃんぐ 実践講座』 参加者募集

— 巨樹古木と鏝絵(てい)文化の残る里・小田を歩く —

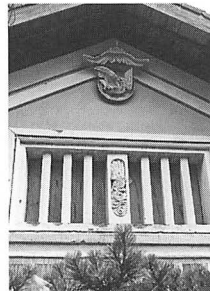
当『舞たうん』に好評連載中の「MY TOWN うおっちゃんぐ」の実践講座を、小田町で開催します。

岡崎さんといっしょに、タウンウォッチングをやってみませんか！

- 日 時 平成10年9月27日(日) 9:30~12:00
- 案内人 岡崎 直司 氏 (『歩キ目デス&足ラテス』執筆者)
- 参加対象 タウンウォッチングに関心のある人ならどなたでも  
募集人数: 30名程度 参加費: 無料
- 集合場所 小田町教育委員会 (小田町役場隣)



乳出の大イチョウ



土蔵の鏝絵

- 主 催 (財)愛媛県まちづくり総合センター、小田町教育委員会
- 問合せ ☎089(932)7750 FAX 089(932)7760  
・申込先 (財)愛媛県まちづくり総合センター 担当: 檜垣

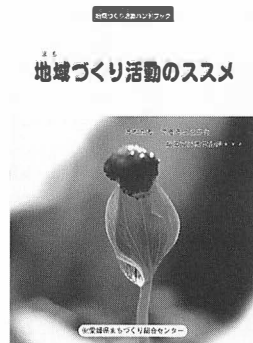
## お知らせその2

# 『まち地域づくり活動のススメ』 発刊

まちセンでは、地域づくり活動をこれからやろうという人、あるいはやり始めた人の参考となるハンドブックを作成しました。

ご希望の方に、送料実費にて、おわけいたします。

- 内 容 「地域づくり活動入門相談室」  
「地域づくり活動第2ステージQ&A」  
「イベントをする人へのアドバイス」  
行ってみたい地域づくり先進地  
地域づくりの話聞いてみたい人々  
地域づくり活動グループ・プロフィール  
地域づくり活動参考図書ほか B5版124ページ
- 問合せ 当センターまで直接来ていただくか、  
・申込先 郵送希望の場合は、送料310円分の切手を添えて  
〒790-0003 松山市三番町8丁目234 県生活保健ビル3階  
(財)愛媛県まちづくり総合センター 担当: 檜垣or藤田まで  
☎089(932)7750 FAX 089(932)7760





お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)  
市町村振興(サマージャンボ)宝くじが  
1枚300円で発売されます。

☆発売期間 7月21日(火)～8月7日(金)

☆抽せん日 8月18日(火)

○1等6,000万円が120本、前後賞あわせて1億5,000万円!  
5万円が8万本、1万円が40万本、ラッキーレジャー賞50万円が  
4,000本あたりです。

◆市町村振興宝くじの収益金は、市町村の明るく住みよい街づくり  
などに使われます。

財団法人 全国市町村振興協会/全国市長会/全国町村会/全国市連合会/全国町村連合会  
収益金は市町村の明るく住みよい街づくりに使われます

7月21日(火)発売

発売期間7月21日(火)～8月7日(金) 抽せん日8月18日(火)



いよいよ夏本番、本当に毎日暑い日が続いています。

クーラーが手放せず夏風邪などひいた方、どこかにおられませんか。そんなあなたは、ちょっとぴり温度を上げてみましょう。きっと地球も喜んでくれると思いますよ。

私も、今年は自然な夏を感じてみることにしました。

山へー、海へー、あれっ、何かが違うような……。

(伊)

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に「舞たうん」編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町八丁目三三四

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり総合センター

TEL089(932)7750

FAX089(932)7760

発行/平成十年七月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

印刷/三創印刷株式会社